「川の記憶」の語りを伝承する
――令和元年東日本台風による被災地での対話と語りあい――
Handing down the narratives of “memories of the river”

伊藤　哲司/杉浦　彰子/槇田　容子
藤田由美子/関口　豪之/馬場紗矢香

要約

本稿は、2019年10月に来襲した令和元年東日本台風による水害を被った地域のひとつである茨城県水戸市飯富地区で行っている取り組みについて、その途中経過を報告するものである。2020年度末から取り組んでいる「災害・地域レジリエンス向上のためのボトムアップアプローチ――対話による環境共創とまちづくりのためのアクションリサーチ――」という共同研究の一部である。背景には、地球温暖化・気候変動による自然環境の変化、少子高齢化などの社会的背景がある。この共同研究では、ライフストーリーインタビューおよびそれを元にした住民参加のワークショップによる災害・地域レジリエンス向上のためのボトムアップアプローチの取り組みを継続させており、本稿では、「川の記憶」の語りの伝承について焦点を当てた。ワークショップでの対話と語りあいが「川の記憶」の共有に有効であることが示され、今後はそれを「伝承」する場の創出が課題であることが示された。

1. 問題の背景

2019年10月、令和元年東日本台風（以下「台風19号」）が東日本を縦断し、茨城県を含む関東甲信越地方や東北地方など広域で甚大な被害をもたらした。カテゴリー5のスーパー台風であると事前に発表され、重大な警戒を呼びかける報道が繰り返しなされて各地で対策がとられたにもかかわらず、台風が通過した地域の多くの河川が氾濫し、全国で105名もの死者と3名の行方不明者（茨城県では死者2名と行方不明者1名。2020年10月13日時点）を出す大惨事となった。このような地球温暖化・気候変動の影響を受けていると見られる大型台風は、今後も繰り返し発生することが予想される。

この豪雨災害に対し、茨城大学は被災直後に三村信男学長（当時）のリーダーシップの元で調査団を組織し、学際的に幅広く調査支援活動を展開した。伊藤は、その調査団の共同団長の1人を務めた。とくに県内で大災害が発生したときには、地元に密着した大学としてこれまでもこのような調査団を立ち上げてきた実績が茨城大学にはあり、平成27年9月関東・東北豪雨災害や、2011年の東日本大震災のときも同様の茨大調査団が活動している。これらの調査団の活動成果は、大学HPで公開されている（茨城大学, 2021ほか）。

台風19号の来襲では、常磐道・水戸北スマートインター周辺が、近くを流れる那珂川とそこに流れ込む田野川・藤井川・西田川からあふれた水で水没した（図1）。茨城大学水戸キャンパスからほんの数キロしか離れていないこの水戸市飯富地区での発災は、私たちにとって見慣れた風景を一変させ、大きなインパクトを与え、そこで何かをしなくてはと

『人文社会科学論集』2, pp. 219-230.
© 2023 茨城大学人文社会科学部（人文社会科学部紀要）

図1　台風19号で被災した水戸北スマートインター周辺（2019年10月）

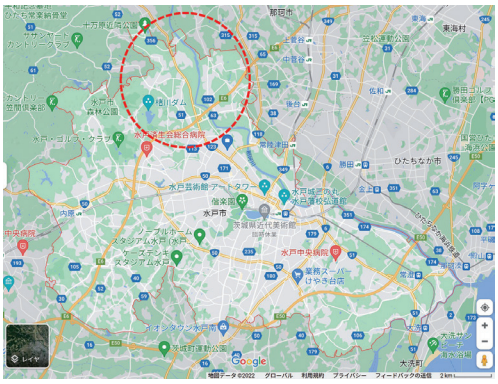

図2　水戸市飯富地区のおおよその位置（Googleマップ）

いう思いを強く抱かせた。直後は、災害ボランティアとしての活動（学生にも参加を推奨）が主であったが、そのような短期集中の活動にとどまらず、中長期的にそこに関わっていく必要があると考えた。その理由は次の通りである。

世界的な気候変動により豪雨災害の発生頻度が上がり規模が拡大するなどの自然環境の変化が顕在化している。また同時に、とくに都市部ではない地方における少子高齢化などの社会環境の変化が、地域社会の持続性に大きな困難さをもたらしている。社会環境の変化の例としては、子どもの減少とそれに伴う子ども会組織の消滅、学校の統廃合がある。さらに若者たちが地域を離れ、進学や就職により、将来も元の地域に戻ってこない状況で、地域の祭りの維持が難しくなっているケースも多い。また、空き家・空き地が増え、それらをいかに管理するかも大きな課題である。

このような問題を抱えている地域のひとつが水戸市飯富地区である（図2）。これらの問題に取り組み解決に近づくためには、当然相応の時間が必要だということは明らかである。

ところで、21世紀に入って登場したサステイナビリティ学（Sustainability Science: 持続可能性学）は、地球・地域環境に対する人々の意識を高め、国や自治体に具体的な気候変動の影響に対する緩和策・適応策を促し、関連する法制化などを後押しした。茨城大学でもいち早くサステイナビリティ学に着目し、ICAS（地球変動適応科学研究機関: 2006年設立）やその後継組織であるGLEC（地球・地域環境共創機構: 2020年設立）などを立ち上げ積極的に取り組んできている。しかし国内外の多くの研究者によって取り組まれているサステイナビリティ学は、有効な知の積み上げを社会の期待どおり十分にしてきたとは言いがたい側面がある。具体的には、自然科学による知見を地域の社会・文化・習慣を十分に配慮しないままトップダウンで「社会実装」しようするケースが多く、地域の人々のあいだに「社会浸透」して根付くケースは必ずしも多くない。

そこで求められるのは、社会心理学・社会学などの分野で行われてきたフィールドワークの方法論であり、対話や語りあいを重視したボトムアップによる「関わる知」の創出である（一方、対象と一線を画して「客観的」であることを重視しトップダウンにより生み出されるものを「関わらない知」と呼ぶ）。そのような知を追究する姿勢を強く持つアクションリサーチは、当該のフィールドの人々自身にとって良い方向（ベターメント）へ向けて変化を起こすことを強く志向する。外部から参入する参加者（研究者・学生等）は、

いわば「触媒」のような役割を果たし、その変化プロセスに同行しサポートする。私たちの共同研究は、このような部分を中長期的に担っていくものである。

2. 本研究の目的

私たちの共同研究の目的は、地域の社会環境の課題（少子高齢化、若手の減少、若手の多忙化、若者の地域離れ、空き家・空き地の増加等々）を見据え、気候変動の影響によってさらなる激甚化が見込まれる災害に対応するために必要なレジリエンス向上と地域環境共創を実現させることであり、これに関わる地域住民中心の対話と語りあいの継続による個人の経験知を地域知にしていく「仕掛け」をつくることである。そしてそれらの「仕掛け」は、いずれ地域において自立的で持続可能なものとなることが必要である。主役はあくまで住民であり、その地域を担い続けるのは住民であるからである。

地域が抱える諸問題の根底には、住民のあいだの心地よいつながりと、ほどよく豊かなコミュニケーション（対話と語りあい）が衰退していることがある。地域内のコミュニケーションを現代の状況のなかで回復させることで、現在の状況に合った地域コミュニティを編み直していくことにつながるだろう。そして住民が地域の環境をあらためて見直し、地域の魅力を高める取り組みにつながる。そこから地域環境をあらためて共に創ることへとつなげていくことができ、災害に対するレジリエンスの向上をも図ることもできると考える。

このような発想の背景にあるのは、心理学や社会学などの分野でのライフストーリー研究の学術的な積み重ねである（たとえば、やまだ（2001）、やまだ（2022）などの一連の研究等）。本研究の独自性は、個人ストーリーから地域ストーリーへと展開を強く意識する点にある。従来のライフストーリー研究で扱われた個人の人生の物語には、その人が生きてきた地域の歴史や地理の要素が織り込まれている。そこで本研究では、今まで個人の中にあったストーリーが住民同士の対話や語りあいを通してオープンになっていくことで、どのような地域ストーリーが共同生成されていくのかに着目する。

このようにして生成された地域ストーリーこそが、地域住民の次の思考や行動を変えていく。ブルーナーが指摘したように、人は自然科学的な思考である論理・実証モードよりも、自らを取りまくストーリーをベースにした物語モードで生きている。ならばよりよいストーリーへと変えていくことが必要であり、対話や語りあいは、それを紡ぎだしていく装置となりうる。アクションリサーチにより継続する対話や語りあいをツールとして、個人のストーリーを有効な地域ストーリーへと共同生成することに繋げるこの取り組み自体を「仕掛け」とし、その有効性を検証する。

本研究で使っている「レジリエンス」という概念についても触れておく。本研究ではそれを、「柳の木のように曲がっても元に戻るしなやかな回復力」と定義する。防災などのためのレジリエンスの向上には、ハードウエアによるもの（たとえば築堤によって水の侵入を防ぐ）やソフトウエアによるもの（たとえばハザードマップを住民たちに周知徹底する）がある。これらは、基本的にトップダウンで人々に与えられるものである。これに対して本研究で重視するのは、地域住民による対話や語りあいが促進されることによって災害等へ対処する身構えができ、具体的な対策が生み出されてくようなこといわばヒューマンウエアによるボトムアップによるレジリエンスである。それを日常生活に組み込み、地域環境を住民が主人公となって共創していくかたちをつくることによって、災害時にもし

なやかに対応できる地域づくりを目指しているわけである。そのためには、住民同士の対話や語りあいが日頃から自立的に継続していることが必要である。

以上が、私たち共同研究全体の目的であるが、本稿ではその全体をカバーするものではない。以下に述べる住民たちへのインタビューの結果および住民参加のワークショップの結果のうち、とくに「川の記憶」について語られた部分に絞って取りあげる。

3．フィールドの特徴

水戸市飯富地区（田野町、成沢町、飯富町、藤井町、岩根町、藤が原）は、川とともに生きてきた地域のひとつである。都市部に比較的近く、那珂川に流れ込む田野川、藤井川、西田川が流れ、また茨城大学が立地する台地の縁からしみ出す渡里湧水群もある。古代より人々が暮らした証である古墳群がある地域で、創建1000年を越える古い神社（大井神社、藤内神社）や加倉井砂山が開いた日新塾（水戸市指定史跡）などからも長い歴史がうかがわれる。かつては茨城交通茨城線が走り、水戸街中やそれ以遠との人流・物流が盛んであったが、現在では少子高齢化が進み、水害や気候変動による豪雨災害の頻度の高まりの影響もあって空き家が目立つようになってきている。

図3　水戸市岩根町の民家に現存する「木舟」

この地域の人々の自慢は、肥沃な土地でつくられる野菜である。飯富ゴボウなど、地名を冠した野菜も生産され、出荷されてきた。この地域で美味しい野菜が生産できるのは、もちろん川によって肥沃になった土からの恩恵である。かつては那珂川にも堤防が築かれておらず、洪水はわりと頻繁に起きていたようである。今でもそのようなときに使われる「木舟」（地方によっては「田舟」などとも呼ばれる）が、家の軒先などに保管されているところが少ないながらもある（図3）。この地域の人々は、ときにそれらも使いながら生活を送ってきたのであろう。

もちろん洪水は、土地を肥沃にすることがある一方で、被害をもたらす水害にもなりうる。この地域で人々が川とともに生きてきたということは、川からの恩恵を得つつも、洪水・水害とも常に隣り合わせだということでもある。村本（2022）は、東北の三陸地方で津波による被災を受けることの多かった地域を生きてきた人々の営みを「災厄を生きる」と表現した。どのようにしても完全には避けることができない「災厄」をも、人々はそれを含めた歴史を刻み続けてきたということである。水戸市飯富地区も、長い歴史の中で幾度も被害を出しながらも「災厄を生きる」実践の積み重ねをしてきたと言えよう。

そこでは独自の自然観や災害観が育まれてきたはずである。川は人為的にコントロールしきれるものではなく、普段は恩恵をもたらす一方で、時に暴れ川とさえなるからである。そのような自然観や歴史観を近代化による変化が壊してきたという指摘がある（大熊, 2020）。堤防が築かれることによって浸水する頻度は確実に低くなった。しかし同時に、人々が川の水に親しみ、そこから自然の恩恵を受けることも少なくなった。実際、水戸市飯富地区の高齢者の住民からは、子どもの頃に川で遊んだ体験（川の記憶）が語られることが少なくない。それと同様の体験を、現在

の子どもたちの多くは有していない。川で遊び学ぶことよりも、川の危険を避ける方向へと、近代化の流れが引っ張っていったのは明らかである。

4. ライフストーリーインタビュー

この地域に長く生活してきた住民の理解と協力を得て、2021年6月～2022年5月に15組22名（男性11名、女性11名）にライフストーリーインタビューを実施した（表1）。台風19号による被災の経験を中心に、すぐ近くを川が流れるこの地域でどのように生きてこられたのか、その人生の物語（ライフストーリー）についての語りに真摯に耳を傾けた。可能であれば被災現場や川の見える場所でインタビューを行うようにした。語りやそこで共有される記憶は、場所に根付いているという考えのためである。インタビューの時間は1時間から、長い場合は3時間近くに及んだ。許可をいただいた方には録音を行った。なおすべてのインタビューは伊藤・馬場が行ったが、他の共同研究者（杉浦、槇田、藤田、関口）が同席したケースもある。

表2には、インタビューの結果得られた「川の記憶」の語りの例を掲載した。子どもの頃に川で釣りをやった経験を語ったFさん、父親が那珂川の船渡しをやっていたと語るGさん、川がもたらした肥沃な土と美味しい野菜について語ったEさん、蛍・鮭・シジミなど現在ではなかなか見られない生態系の豊かさについて語ったIさん、それに洪水・水害のリスクについて語ったJさんの具体的な語り

表1　調査協力者とインタビューの概要

	性別	年齢	実施日	場所	被災	録音
A	男性	70代	2021/6/18	藤井川他	有	有
B	男性	30代	2021/6/18 2021/9/23	藤井川他 オンライン	有	有 有
C	女性		2021/10/13	岩根町	有	有
D	夫婦	70代	2021/10/20 2021/11/28	藤井町 藤井町	有	有 有
E	女性	80代	2021/10/20	岩根町	有	有
F	夫婦	70代	2021/11/8	飯富町	有	有
G	男性	80代	2021/11/28 2021/12/8	那珂川 岩根町	有	無 有
H	男性	70代	2022/1/27	藤が原町	無	有
I	夫婦	60代	2022/4/25	藤井川他	有	有
J	夫婦	80代	2022/4/25	岩根町	有	有
K	女性	60代	2022/4/28	藤井町	有	有
L	男性	60代	2022/4/28	飯富市民センター	無	無
M	夫婦	70代	2022/4/28	飯富町	有	有
N	女性		2022/5/9	飯富町	有	有
O	夫婦	70代	2022/5/11	藤井町	無	有
P	男性	40代	2022/5/11	飯富町	無	有
Q	男性	60代	2022/5/16	飯富町	無	有
R	女性	60代	2022/5/16	飯富町	無	有

表2　インタビュー協力者の「川の記憶」の語りの例

Fさん	小学1年生の頃から1人でもバケツを持って釣りやったり。1年の時から自分で仕掛け作ってやってましたね。10円もらって、道具を買って。
Gさん	うちのおやじは、舟渡し、渡船場をやってたんですよ。自分の商売でやってたんではなくて、江戸時代から青年会が水戸藩と契約をして、責任持って渡船を舟渡しをやるよっていう約束事があったって言われてるんですよ。
Eさん	物がおいしいよ、何を食べても。肥沃しているから。白菜なんかもう、本当においしいから。那珂川沿岸で、昔水害にあったところはだいたいおいしいですよね。沖積土っていうか、土が肥えてるのよね。
Iさん	蛍もいたんですけど、今はいないですね。たまに鮭も上がってくるんですよ。ボロボロになって。（川は）私にとってはシジミとったりとか、でも食べなかった。あと鮭が産卵のときはすごいですね。ここ何年か見てない。
Jさん	大体那須の方で200ミリ以上降ったらば、危ないよという（目安です）。大雨で決壊したよっていう那須の方の話を聞くと、大体ここは8時間後にいっぱいになると。以前はね。っていうのは結構蛇行してましたからね川ね。だから、流れが遅かったんです。今は大体6時間できちゃいますね。堤防や何か作ってまっすぐにして流れが良くなっていくからね。

図4　作成された「語りマップ」と語りの例

は、いずれも大変興味深い。やはりこの地に長く生活してきたことで生まれたこれらの語りは、この地域の人々が川と関わり続けてきたこと、そしてその恩恵とリスクの両方に向きあってきたことをうかがわせるものであった。

なおこれらの語りがどの場所で行われたのか（もしくはどの場所のことを指しているのか）を示すために、Googleマイマップを活用し、そこにピンを立て、それをクリックすると語りがポップアップするようにした電子地図を作成した（図4）。それを私たちは「語りマップ」と呼ぶことにし、他の住民と語りを共有し、さらなる語りの生成を促すツールとして使用することにした。この「語りマップ」は、オンライン上で共有しながら使うこともでき、ワークショップを進めながらさらに共同生成していくこともできるツールであり、今後さまざまな活用の可能性があるものと考えている。

5. 住民参加のワークショップ

このようにして作成された「語りマップ」を使った住民参加のワークショップを企画した。ワークショップ参加の呼びかけをしたチラシを作成し（図5)、このチラシを地元の方に配付していただくことでインタビュー協力者以外にも参加を呼びかけ、結果として小学生から80歳代の方までを含む47名の参加が得られた。またスタッフとして、共同研究者の他に、伊藤ゼミなどの学生たち数名も参加した。場所は、この地区の住民にとって馴染みがある水戸市飯富市民センターとした。実施日時は、2022年7月2日（土）13:00〜16:00であった。

「飯富エピソード」「川の記憶」「水害の記憶」「未来」という4つのグループをつくり、それぞれのテーブルに「語りマップ」が見られるディスプレイとパソコンを用意しスタッフが操作をした。また、電子地図に不慣れな参加者もいることを考慮し、紙の地図も用意した。自分自身が撮った水害時などの写真を持参している参加者もあり、それらもしばしば参照された。なおグループ替えを3回行い3セッション設けたが、基本的に自分が行きたいグループに移動（もしくは移動しない選択もあり）とした。なお将来のこの地域について意見を出しあう「未来」だけは、2回目・3回目のセッションのみで選択可とした（表3)。

各グループで語られた内容は、録画および録音記録を残した。またその場での語りを、スタッフの学生たちができる範囲で「語りマップ」にも反映させていった。実際のワークショップの様子（図6）からは、住民たちが大いに語りあっていることがわかるだろう。参加者の多くが私たちとすでに顔なじみになっていたこと、若い学生たちがスタッフとして参加していたことも、この場が盛り上がる大きな要因であったと考えられる。

このワークショップでの「川の記憶」のグループで生成された語り一部を抜粋する。インタビューの語りと質が異なるのは、誰かの語りに呼応して別の語りが生まれてくるということである。これは共同語り（呉, 2001）の一種であると言えるだろう（「共同語り」と対照されるのは「個人語り」である)。

語りあいの例（1)

住民a:　私の父親の時の話を聞いてる限り

表3　ワークショップ（2022年7月2日）タイムテーブル

時間	内容	担当
9:30	○集合・セッティング	
10:00	○ワークショップリハ	
11:30	昼食	
12:30	○準備	
12:45	○受付開始	
13:00	★スタート	
	・挨拶・趣旨説明/研究活動の紹介	伊藤先生
13:10	○スタッフ参加者　自己紹介	全員
13:20	○ワークショップの説明　（セッションの説明も	杉浦
13:30	❶第１セッション	
(30分) 14:00 (10分)	・「飯富エピソード」「川の記憶」「水害の記憶」3グループに分かれて語り合い 【グループワークメンバー】自由 【進行方法】 ・スタッフと大学生が協力して進行 ＜STEP１＞メンバーの名前紹介（簡単に短く） ＜STEP２＞「語りマップ」の担当レイヤーをまずはみんなで見てみよう ＜STEP３＞「語りマップ」を見ながら、エピソードを話そう、聞こう ※参加者は「語りマップ」や紙のマップを見て、思い出を付箋に書いて紙マップに貼る ※語りを「グループワークレイヤー」学生が書き込む ＜STEP4＞出来上がった「語りマップ（紙マップでも可）」を見て語り合おう →語りはメモを取っておく 【役割分担】 ・進行係 ・マップ記録係 ・マップ作り補佐	
14:10 (15分)	○各グループ発表（5分ずつ）	
14:25	休憩（10分）	
14:35	○第2セッショングループ分け ・「飯富エピソード」「川の記憶」「水害の記憶」に「未来」を加え、好きなグループに移動 ※スタッフ・学生は固定	
14:40	❷第2セッションスタート	
(25分)	＜STEP１＞第１セッションで作ったレイヤーを見て語り合う ＜STEP２〜３＞	
15:05 (５分)	＜STEP4＞	
15:10	○第3セッショングループ分け ・好きなところ（同じでもよい	
15:15 (20分)	❸第３セッションスタート	
15:35	○各グループ発表	
15:55	○全体振り返り・まとめ・次回予告？	伊藤先生
16:00	★終了	
	片付け	

飯富地区の思い出を語りあい、ともに未来を考えるための
ワークショップへのご参加のお願い

水戸市飯富地区には、那珂川をはじめ、藤井川、西田川、田野川の４つの川が流れています。川は地域に恵みをもたらす一方、台風 19 号（2019 年）が来襲したときのように大きな被害を与えてしまうこともあります。この地域にお住いの方々は、さまざまなかたちで川と関わり過ごされてこられたことと思います。むろん同じ飯富地区でも、川のすぐそばにお住まいの方もいれば、高台など川から離れたところにお住まいの方もおられることでしょう。それぞれのご経験から、この地域についてさまざまな思いや記憶をお持ちかと思います。

この飯富地区の地域に対するみなさんの思い出をインタビューで伺い、それを電子地図に載せたものを用意しつつあります。またそこには、地域の写真などもできるだけ掲載します。そしてそのようにしてつくられた電子地図をみなで囲み語りあうワークショップを開催いたします。そのワークショップを通して、みなさんの思い出や記憶が蘇り、それらを共有することができるでしょう。さらに、今まではっきりとは気づいていなかった地域の魅力や課題に気づくことができるかもしれません。そのなかから、地域問題を解決するための新しいアイデアが生まれ、地域力のアップにつなげていくこともできるのではないかとも思います。

今回のワークショップには、学生たちも参加させていただきます。若者との交流も同時に楽しんでいただければとも思います。これをきっかけに多くの声が重なりあい、この地域をより良い方向へと進める契機となることを期待いたします。ご多忙とは思いますが、ぜひご参加ください。どうぞよろしくお願いいたします。

ご参加いただける場合は、電話
もしくはメールでご一報ください。

茨城大学人文社会科学部　伊藤哲司・馬場紗矢香
090-XXXX-6xxxx，tetsuji.ito.64@vc.ibaraki.ac.jp

記

日時：2022 年（令和 4 年）7 月 2 日（土）13 時～16 時
場所：飯富市民センターホール
※外部から Zoom で参観していただくことも可能です。
Zoom：https://us06web.zoom.us/j/8331364XXXX?pwd=
czgreVZzU21pWXBkU1lPOWpqK0RQdz09
ミーティング ID: 833 1364 XXXX　パスコード: XXXXXX

図5　ワークショップ参加の呼びかけのためのチラシ

図6　住民参加のワークショップ（2022年7月2日）の様子

では、川でよく遊んで、普通にプール代わりになってたような感じっすよ。

住民b：昔青年団が子供たちを面倒見てくれたの。だからそこで、水府流っていって、1級2級、4級から始まるのね。水泳を、ほら昔「のし」っていうの?

住民a：そうですね。のし。水府流っていう、泳ぎ方の一種なんです。

研究者c：のし?

住民a：しゅーってやって、こっちにかいて、っていう

研究者c：顔がずっと出てるっていう

住民b：昔はね、着物をここら辺に置いて、浮いて。川に全部体入れちゃうと、着てるもの濡らしては困るでしょ。

研究者c：半身で?

住民b：そうそうそう。

住民a：頭に括り付けてたんですよ。きっと。

研究者c：へー

住民b：水害になる土地だったからね。昔ね。

（中略）

住民d：今大学生で、水泳の授業とかで水府流とか教えてる人いないんですか。

学生e：自分は聞いたことないですね。

住民f：郷土かるたで聞いたくらいですよ。

研究者c：郷土かるた?

住民f：郷土かるた。水戸の郷土かるたってあって、それにあるんですよ。

住民d：昔は、茨大で体育専攻の人は全部、水府流まで全部やったんですよ。のしっていうのかね。それを、一週間夏休みね、集中講義があって、プールで練習して、霞ケ浦まで行って、4キロ泳がなきゃならないです。その4キロ泳ぐのに、一番のしとかそういうのを。

住民b：楽な泳ぎなんだよね。

語りあいの例（2）

住民g：さっき昭和61年の洪水の話があったでしょ。あの前にね、4，5年、那珂川でね、やってたんですよ。いかだ下り。みんながデコレーションして作ってそれであのどこだ、あれ。

住民h：水戸市ですよね。水戸市主催で。

住民g：うん。水戸市主催のね、それでやってたんですよね。でその61年の水害を機にやめちゃったんですけど。

住民h：あのスピードの部と

住民g：そうそう、スピードの部とその仮装の部みたいな形でね。

住民h：すごい派手で。

住民g：（また）やってみるといい。面白かったですよね。

語りあいの例（3）

住民i：飯富からすれば藤井川が一番暴れ川。それで、那珂川は今の形と同じようには流れてました。だけど堤防はなかった。部分的にはまっすぐしたとこもあって、昔あったところの池に、お魚がいっぱいいて、釣りに行って、子供の頃ね。それが楽しかった。そのあとね、それで洪水が起きた時は、堤防がないでしょ。低いところから水かぶるのは当たり前だ。当たり前。それはどこの川だって。堤防がないから上流の方の全部低いところが水かぶるって覚悟はみんなしてたの。水がかぶるところに家が

建っているんだから。かぶるところは荒れ地になったり、木を植えて、昔はお蚕さんの桑、そういうのを植えて農家さんは、飯富っていうのはほら、農家だから。農業つうのはどこで発達したかって言うと、やはり、肥沃な土地のところで発達した。農業と生活するところがだいたい同じ。

参加者たちにとっては、年輩者のみならず、子どもを含む若手の参加もあったことで、時間の許す範囲で思う存分語ったという実感が得られたのではないかと、参加者アンケートの結果からはうかがわれた。たとえば「飯富のことをよく知っていると思っていたのですが、知らないことがたくさんありました。私の知っている飯富はほんの一部分で目を見張る思いです」といった声が聞かれた。一方で「このワークショップで語ったこの次に何をやるのか?」という批判的な意見も聞かれ、たしかに語りあっただけに留めてはいけないということを、私たちもあらためて感じた。これらの語りを詳しく分析すると同時に、次なる具体的なアクションにつなげていくことが必要である。

また、本研究が重視している対話と語りあいであるが、対話は、ときおり対立に陥ることもある。たとえば被災地での復興に関する説明会で、行政側と住民が正面からぶつかってしまうことがしばしばある。むろん対話は必要であるが、「二項関係」の対話から、共通の課題を可視化した第三項（たとえば地域の地図や写真）をともに眺めながらおこなう「三項関係」の語りあいへとパラダイムシフトさせることが有効であることが知られている（図7）。このワークショップで活用した「語りマップ」は、そこに向かって語る参加者たちの姿勢が顕著で（図6）、三項関係の語りあいのためのツールとして大変有効であることを、以上の実践から再確認をすることができた。

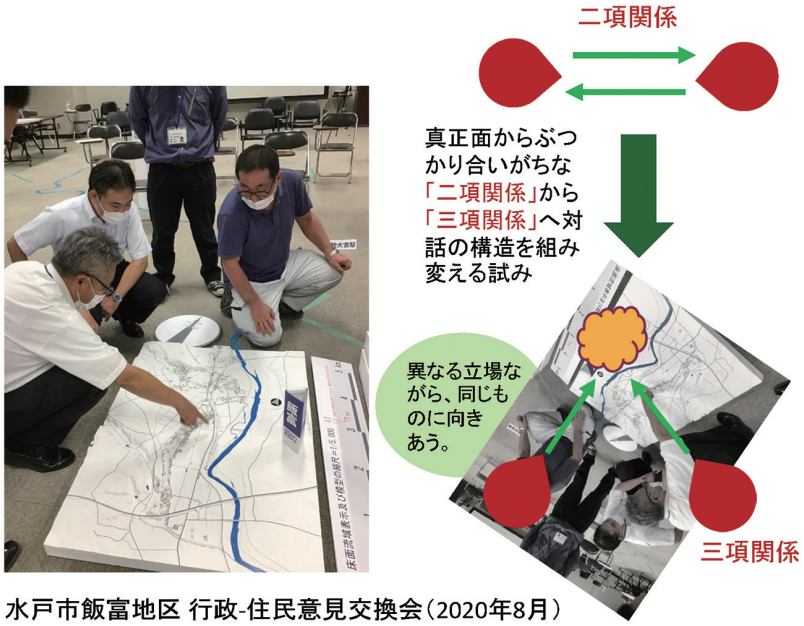

図7　二項関係から三項関係への転換

6. 今後の課題

本稿のタイトルは「『川の記憶』の語りを伝承する」であるが、ここまでのところで「伝承」にまで十分触れることができていない。伝承は、ある対象を有している人から有していない人へと伝え受けとめてもらうことを意味する。伝え手と受け手がおり、伝えようという意思が働き、受けようという身構えが必要である。

本研究の今後の課題のひとつは、そのような場の創出である。本稿執筆時（2022年9月）後に予定しているのは、地元の飯富小学校での実践である。同小学校では、2022年7月に5年生を対象としたSDGs教室を伊藤が中心となって担当しており、その継続となる教室を同年10月に予定している。そこでは10歳前後の子どもたちに、この地で長年生きてきた年輩者が語りかけ、かつての川との関わりについて語り、身近な川の環境のことを見つめ直してもらう機会とし、さらにそれをSDGsに結びつけて考えてもらう機会とする予定である。

もちろん「伝承」は、大人から子どもへとは限らない。受け手は、そのことを詳しく知らない大人ということもありうる。地域住民も、そこで生まれ育った人たちばかりではないのは明らかであり、現在そこに住んでいても知らないことはたくさんあるものだろう。そのようなことから、住民同士で伝承しあうという場をさらにつくっていくことも必要である。上述の住民参加のワークショップが、すでにそのような場であるが、そこまで大がかりに設定した場でなくても、住民同士で、あるいはそこに私たちも加わって地域について考え気楽に話せる場所をつくっていくこともまた、今後の課題である。

さらに取り組みたいと考えているのは、インターローカルな展開である。たとえば同じく被災をした地域とインターネットでつないで、同時に語りあいの場を創造することが考えられる。2020年から始まったコロナ禍は、オンラインで直接やりとりするZoomなどのツールをこの社会に定着させた。そのようなオンラインツールを使うことは比較的容易であり、しかも複数拠点をつなぐこともできれば、国境を越えることさえできる。インターローカルは、ローカルとローカルを結び、その間に学びあいが生まれ新たな知を見出していこうという発想に基づいている（伊藤・矢守, 2009; Ito, et al 2022）。その有効性は、茨城県大洗町と高知県黒潮町をつないだ実践（李, 2020）で、津波被災地と津波未災地それぞれの地域の人々が出会い対話し語らうことから災害に対するレジリエンスを高める地域ストーリーが醸成され、防災・減災のための実践に結びつく効果があったことにも示されている。

現在構想しているのは、台風19号の被災地である大子町と結んでのワークショップである。大子町からは、台風19号の被災の記録づくりを委託されており、上述の水戸市飯富地区のワークショップには、実はすでに大子町役場の職員がオンラインで参加していた。語りあいに直接加わることはなかったものの、語りあいを聞いた最後に、「飯富地区の皆さんの話を伺って、大子町の住民よりも比較的前から水害に備えて避難準備を開始している人が多いことがわかり、飯富地区に見習うところがある」とコメントしたのであった。

伊藤が長年研究教育の両面で関わってきているベトナムは、台風被害が多い一方で、水に親しんだ生活が長い歴史の中で営まれてきた地である。ベトナム語で「水」を表す「nước」という言葉には「国」（「故郷のお国」という含意）もある。たとえばベトナム中部の古都フエにはフオン川が流れ、その郊外は洪水と共生してきた場所である。将来的には、そのような地ともインターローカルにつ

なぐことも計画したい。それによって本研究の問いが、国境を超えたもの人間の根源的問いであることを示すことになるだろう。

引用文献

茨城大学　2021　令和元年東日本台風調査団最終報告書　https://www.ibaraki.ac.jp/news/2021/03/31011180.html
（最終アクセス：2022年9月23日）

伊藤哲司・矢守克也　2009「インターローカリティ」をめぐる往復書簡　質的心理学研究, 8, 43-63.

ITO Tetsuji, TAMURA Makoto, KOTERA Akihiko, and ISHIKAWA-ISHIWATA Yuki (editors) 2022 “Interlocal Adaptations to Climate Change in East and Southeast Asia: Sharing Lessons of Agriculture, Disaster Risk Reduction, and Resource Management Asia” Springer

李冉昕　2020「被災地―未災地」の交流勉強会―茨城県大洗町と高知県黒潮町―　日本災害復興学会誌復興通巻第22号（Vol.8, No.4）

村本邦子　2022　災厄を生きる: 物語と土地の力――東日本大震災からコロナ禍まで　図書刊行会

大熊孝　2020　洪水と水害をとらえなおす―自然観の転換と川との共生　農山漁村文化協会

呉宣児　2001　語りからみる原風景―心理学からのアプローチ　萌文社

やまだようこ編　2001　人生を物語る: 生成のライフストーリー　ミネルヴァ書房

やまだようこ　2021　ナラティブ研究――語りの共同生成　新曜社

（いとう・てつじ　本学部教授）
（すぎうら・しょうこ
地球・地域環境共創機構）
（まきた・ようこ
国立環境研究所）
（ふじた・ゆみこ
日本原子力発電株式会社）
（せきぐち・ひでゆき
日本原子力発電株式会社）
（ばば・さやか
茨城大学人文社会科学部）